

2020年度（2020年7月1日～2021年6月30日）事業報告

□この1年

2020年から世界に広まったコロナ禍の影響を、当会の活動も大きく受けています。ラオスでは何回かのロックダウン（他都市への移動禁止令）があり、ヴィエンチャン県で進めている中等学校図書館整備を通じた読書推進事業の実施のために、ラオス事務所スタッフが県境を越えセミナー調整、実施などのために事業地を訪れることが制限され、プログラム進行に遅れが生まれました。また図書館建設の監理や図書館担当の先生方、行政官に対するセミナーのための日本人専門家派遣が1年半にわたり不可能となり、代わりにオンラインによるアドバイスをおこないましたが、現場の空気感、細部のニュアンスなどは、必ずしも十分に把握できないきらいは残りました。

東京事務所は、ほぼ一年にわたり基本テレワーク体制となっています。各種イベント開催が引き続き開催不可能となったことにより、組織運営費の調達に大きな影響を与えました。このような困難な状況の下、ご支援をいただいている皆さまからは、特別募金や冬募金、カレンダー購入などにより多大なご支援をいただくことができ、決算において黒字とできたことはご支援によることと実感します。厳しい環境でしたが、オンラインによる事業調整や、イベントの開催、さらに多様なメディアを用いた広報などが定着し、各スタッフの努力により、これまでとは違う取り組み方の工夫により、コロナの影響を最低限抑えることもできたと感じています。

活動の課題、重点的取り組み

2020年度も、第8次中期計画に基づき活動を展開しました。これまでと変わらず、国際協力NGOとして活動の質を高め、安定した運営が長期的におこなえるよう取り組みを継続しました。駐在スタッフの努力もあり、コロナ禍でも、東京事務所とラオス事務所の情報共有が継続し、組織運営および事業におけるPDCAサイクル（Plan計画→ Do実行→ Check評価→ Act改善）が定着してきています。

昨年度から始まった日本NGO連携無償資金協力事業によるヴィエンチャン県での図書館整備を通じた読書推進事業は2年目に入り、中等学校2校での図書館建設に取り組みました。着工が遅れるなどコロナの影響がありましたが、現地業者の努力により大きな問題はなく完成させることができました。その後、生徒、先生方および村人（村教育開発委員会VEDC）を対象とした、図書利用、管理のトレーニングを実施し、昨年度開設したポンサイ中等学校では、図書館を授業でより積極的に生かす方法を考えるレクチャー、さらに、モニタリング、活動評価もおこない、事業成果を確認することができました。この事業は2022年春に終了します。その後、どのような活動に取り組むことに意味があるのか、定期的に話し合いをおこないました。その結果、新しい枠組を求めるより、現在のプロジェクト地ヴィエンチャン県で、学校の図書館を中心とする読書推進運動の定着、図書館利用の質を変える試みなどをおこなうべきだという意見で、方向性は絞られています。

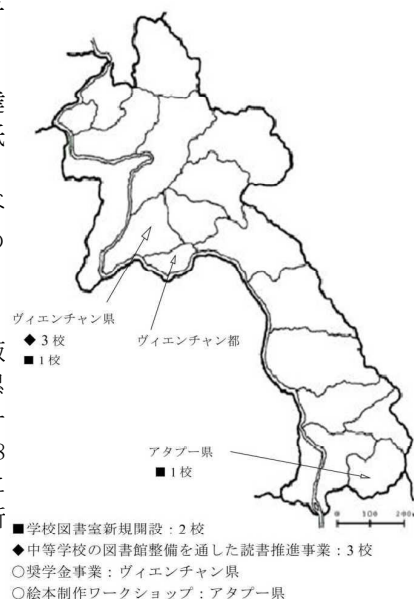
広報、資金調達において特徴的であったことは、「家でできるボランティア」として、ラオス語絵本プロジェクトに予想以上の個人や企業の参加があったことです。参加の皆様にも活動をより詳しく知って、支援者となっていただけるように組み立てる必要性を感じています。ラオス事務所で昨年度開始した読み聞かせ動画により、広く子ども達に絵本を親しんでもらう試みは、評判も良く、継続して新しい本や紙芝居を追加しています。

今年度も大変困難であった年でしたが、オンラインを利用したイベントの開催や、活動参加など、新しい試みが定着し始めており、次の展望につながると期待します。

成果

皆さまのご支援の結果、今年度は、ラオス語図書4種類5,800冊を現地で出版し、4か所で新規の学校図書室を開設することができました。今年度末までの累計ではラオス語図書 228種類 924,555冊（図書193/紙芝居19/教科書類6/ニュースレター10）を出版し、ラオスの小中高校10,638校（小学校8,822校、中学校1,816校）のうち、329カ所で図書室（うち16カ所は地域文庫）を開設し、2,732校に図書セットを配付。2,328校でフォローをしました。また、これまで全国14ヶ所の子どもセンターの運営を支援し、活動の活性化を支援しています。

2020年度 事業対象地域図



プロジェクト運営

<計画> ラオスの子ども達の教育環境を改善する働きかけとして、今期も引き続き、ラオスにおいて以下の活動をおこなう

1. 子どもたちが読書に親しむ環境を整える「読書推進活動」
2. 子どもたちに良質な本を提供する「出版活動」
3. 子どもたちの居場所と音楽や創作表現活動の機会を提供する「子どもセンター運営支援」

さらに日本では、ラオスの状況や実施事業を紹介すると共に自己資金の拡充のために、各種イベントの参加と実施、出前講座活動、ラオス語絵本プロジェクトなどを展開する

I 読書推進活動

I-1. 中等学校の図書館整備を通じた読書推進事業

<計画> 生徒数の増加に比し図書室の整備が遅れている中等学校（中学4年高校3年一貫校）において、図書館整備を実施。事業は3か年の計画で実施し、図書館建設と共に、教員や生徒へ図書館研修を実施する。2年目は、ヴィエンチャン県ポンホーン郡、ヒンフープ郡で2か所の中等学校で図書館の整備をおこない、学校を管理する郡教育スポーツ局と村教育開発委員会と連携する体制を作ることで、持続化を目指す。昨年度図書館を建設したポンサイ中等学校では、更なる定着のために図書館応用研修を実施する。

<実施>

1) 関係機関との協働枠組みの構築

8月19～20日にサカ中等学校、21～22日にヒンフープ中等学校の村教育開発委員会（VEDC）のメンバーに対し研修を実施。ポンホーン郡ならびにヒンフープ郡教育スポーツ局（DESB）が講師となり、VEDCと学校図書館の意義や役割を伝えるとともに、建設中の図書館を視察し、持続可能な図書館運営に向けてVEDCがどのようなサポートをできるかを共に検討した。

2) 図書館の建設

サカ・ヒンフープ中等学校の建設工事は、コロナ禍により建築家が現地に渡航できなくなったため、ラオス人施工監理者と連絡をとり、随時進捗状況を把握しながら進めた。現地立会に比べ意思疎通に難しい部分もあったが、工期はほぼ予定通りに進み、床面積120㎡、78席、本棚10台の規模の図書館が9月末に完成した。生徒や教員から聞き取りをおこない、教科書やカリキュラムに適した本を選び、各校3,202冊（ラオス語89%、タイ語10%、英語1%）の蔵書とした。

3) 教員及び生徒のトレーニング

サカ・ヒンフープ中等学校各校で、図書館担当教員5名と図書館ボランティアの生徒15名に対し、ラオス国立図書館とともに「図書館運営研修」を2回に分けて実施した。第1回目は9月22～24日（サカ）、28～30日（ヒンフープ）、第2回目は10月13～14日（ヒンフープ）21～22日（サカ）におこない、図書の登録、貸出方法、入館者記録、図書カードの作成などの図書館の管理運営を教授した。また、生徒が図書に親しむ方法として、本を利用した読み聞かせ・劇・暗唱・輪読・ゲームなどの手法を伝授した。研修後、サカ中は10月23日、ヒンフープ中は10月15日に引き渡し式を実施した。

4) 図書館応用研修

図書館開設後2年目となるポンサイ中等学校では、図書館活動の活性化と学校教育に寄与する図書館活動の実践を目指して、図書館応用研修として図書館情報学専門家下田尊久さんのオンラインレクチャーを含めた「授業における図書活用」と「図書館サイン・展示」の研修を実施した。

5) モニタリングと評価

1月13～15日に、校長・VEDCメンバー・図書館担当教員・生徒などを対象に、各校で図書館の運営や活用状況に関する評価インタビュー調査をおこなった。同時に図書館入館記録や図書貸出記録をまとめ、運営状況を確認した。

3校の図書館利用状況をみると、1日あたりの生徒の来館率がポンサイ中等学校では16%（目標値10%）、サカ・ヒンフープ中等学校では26%（目標値8%）に達し、予想以上の利

用がみられた。また、ポンサイでは、応用研修を受けた多くの教員が、研修後に図書を活用した授業を実践している状況がみられた。

専門家の小林毅さん、下田尊久さん、ラオス事務所、東京事務所合同で評価分析を実施（コロナ禍により渡航が出来なかったためオンラインで実施）。その後、2月17日に3校合同の評価会議を開催し、ラオス外務省・教育スポーツ省と県や郡の関係者、図書館担当教員・VEDCメンバーなど合計53名と共に、事業の実施と成果について検証した。さらに、評価会議後に、郡教育局と学校関係者とともにワークショップを実施し、評価で出された課題の対策を検討し、次年度購入希望の図書リストを作成するなど、次年度運営計画策定の土台作りをした。

6) 3年次の事業開始

3月1日に在ラオス日本大使館にて、日本NGO連携無償資金協力事業3年次事業の契約、署名をおこない、事業を開始。3月22～25日に3校合同でオリエンテーション会議を実施し、県・郡教育局、各校の校長・副校長、図書館担当教員、VEDCメンバーの参加のもと、3年次事業計画の確認と郡教育局、VEDCと当団体の三者による協定書（MoA）の締結を行い、その後学校図書館運営計画策定ワークショップとFacebookネットワーク研修を実施した。

4月20～23日で、サカ・ヒンフープ中等学校での図書館応用研修（図書館サイン・展示）を実施する予定であったが、研修途中でロックダウンが発令されたため、サカ中は研修を完了したが、ヒンフープ中では実施出来なかった。その後も県外移動制限が続いたため、5月～6月の実施予定の活動は延期となった。

<成果と課題>

事業3年次（最終年次）に入り、郡教育局やVEDCの学校との連携や図書館支援に対する認識が高まってきた。また図書館担当教員も、基礎的な図書館運営業務だけでなく、新着図書の紹介展示をしたり、どんな図書や資料を購入したいかなど、自分たちの図書館のニーズに合わせて意見を持つようになり、自主的・継続的な図書館運営を可能にする土台が出来てきた。

一方で、コロナの影響で3年次の活動が計画よりも3～4ヶ月遅れが生じている。実施スケジュールの見直しをはかるとともに、引き続きコロナ禍の状態が続くなかで、事業の期間延長も視野に入れ、効果的・効率的な事業遂行を考える必要がある。

（日本NGO連携無償資金協力事業）

I-2. 学校図書室（ハックアーン）の整備

<計画> 小中学校の空き教室に本と本棚を提供し、図書室運営に関する教員研修をおこない、学校に図書室を整備することで、子どもたちが日常的に図書に接する機会をつくる活動を継続する。特にこれまでに設置してきた学校図書室の活動の停滞化を防ぐため、フォローアップを強化。ヴィエンチャン都及びヴィエンチャン県の3郡で、昨年度に状況調査をした図書室8か所を訪問し、フォローアップを実施する。また、既設置図書室7か所を訪問して、状況調査をおこなう。新規学校図書室を1か所で開設する。

<実施>

既存の学校図書室のフォローアップ活動は、8月にヴィエンチャン都3校、12月にアタプー県5校、3月にヴィエンチャン県2校を訪問し、図書の補充と運営研修を実施した。また、18校の既存学校図書室に図書の補充をした。

ヴィエンチャン県内3郡（ヴィエンカム郡、ケウドム郡、トゥラコム郡）の既設置図書室の状況調査については、事業対象エリアの見直しにより実施しなかった。

（ご支援：緊急募金、指定寄付、キャノン(株)、(公財) ベルマーク教育助成財団）

新規開設は下記の2校で実施し、これまでの開設累計は327校になった。開設時には、担当教員を対象に図書館運営研修を実施した。

11月10日 HA326 ナーサム中等学校（ヴィエンチャン県） 福岡那の香ライオンズクラブ
12月12日 HA327 ヴァンタッド中学校（アッタプー県） 沖電気工業株式会社

<成果と課題>

今年度は、フォローアップで10校、新規開設で2校、併せて12校の図書室を訪問することができた。近年の課題であったフォローアップ活動に力を入れ、事前の調査状況を踏まえた上でフォローアップの内容を検討し、各校の状況に合わせたきめ細やかな対応ができた。今後もしばらくと現場状況について東京とラオスで情報を共有しながら、効率的・効果的な支援校の選定をしていきたい。

I-3. ALC図書館（ラオス事務所併設図書館）活動

<計画> 昨年度のスタッフ研修を生かし、配架や展示を工夫し読書に興味を湧く空間作りや、子どもたちが主体的に参加するアクティビティを工夫することで、子どもたちの満足度を高め、来館者数の増加をめざす。

- ・既存の活動の内容を検討しつつ継続的に実施するとともに、年間で1～2回、新規活動を企画する
- ・学校図書館と授業との関係づくりに関するスタッフ研修をおこない実践する

<実施>

- ・首都ロックダウンや学校閉鎖に伴い、2020年3月～8月31日、2021年4月22日～6月30日の期間、図書館を閉鎖した。
- ・図書館再開期間は、これまでの週6日（平日9時～17時、土曜9時半～15時）から、週5日（平日9時～17時半）の体制に変更した。学校再開後も学校が昼休み中の生徒の外出を禁止していたため、図書館の来館者数は1ヵ月平均20人と落ち込んだ。
- ・10月と11月に、専門家の下田さんと渡邊駐在員のもと、ラオス事務所スタッフが「図書館サイン・展示」「授業における図書活用」の実務研修を実施した。図書館展示については、実際にテーマ展示を4点実践した。

<成果と課題>

コロナの影響により通常の図書館活動が停止していたため、活動内容の見直しを検討出来なかった。一方、I-1の事業に連動した「図書館サイン・展示」「授業における図書活用」の実務研修を通じて、スタッフの図書館活動のスキルアップを図ることが出来た。

図書館活動の実践・実験の場としても、併設図書館は存続させたいところであるが、一旦落ち込んだ来館者をどう呼び戻すのか考えていく必要がある。

I-4. 新規事業の案件形成

<計画> これまでの読書推進事業の実施経験を活かし、内容を発展させた読書推進事業を2年後に開始するために、案件形成のための調査・検討をおこなう。過去に実施した「学校図書室の地域への展開事業」の事後調査をおこなうと共に、住民による地域文化継承活動の検討など、様々な角度から、案件形成のための情報を収集し、展開すべき案件を検討する。

<実施>

9月に2018年1月に終了した「学校図書室の地域への展開事業」の事後調査を、事業対象地全6郡のうちのヴィエンチャン県ファン郡、ムーン郡、サナカム郡で実施した。その後、案件形成をおこない、12月にJICA草の根技術協力事業に申請をしたが不採択となった。外務省日本NGO連携無償資金協力についても事業継続について担当者から意見を求めるコンサルテーションを実施した。その結果、こちらの方向性と先方の期待に若干のズレがあり、申請には至らなかった。

公的資金の選定と案件形成については、次年度の早い段階で方針を決定し、再度申請に向けた準備を進める。

II 出版プロジェクト

<計画> 専門家のアドバイスを得て、質の高い図書を計画的に出版する。出版については、文化継承を意識した本、著作権を得た海外翻訳本などを含めて、多様な本を計画的に出版できる体制をつくる。

- ・3タイトルの図書または紙芝居の出版をおこなう（うち、新刊1点、再版2点）
- ・スタッフが図書製作業務に関わる技術（編集、デザイン、校正）を習得できるよう基礎研修を実施する
- ・市場を意識した出版をするために、現状調査・ニーズ調査をおこなう
- ・新刊出版に繋がるよう、作者の発掘をおこなう
- ・デジタル図書に対応できる準備を進めるため、著作者との契約にデジタル許諾をふくませる

<実施>

再版3作品、新刊1作品の計5,800部を出版した。当会がこれまでに出版した図書・紙芝居は累計228点 924,555部となった。

	作品名	作者名	出版数	主な支援者
1	『家のまわりの虫』 第2版	文・写真)スックパンサー プーパスック	1,800部	学習院女子大学 絵本出版指定募金
2	『私の村の料理』 第2版	文・写真)カムパケオ インタヴォン、カムトー パイパチャン、ブンタノム ケオマニタン、ラッタナポン ケオマニタン	1,000部	学習院女子大学 絵本出版指定募金
3	『なんのどうぶつ ～文字絵本1～』第7版	詩)ドゥアンドゥアン ブンニャヴォン 絵)絵本制作セミナー参加者7名合作	500部	自己資金
4	『アタプーの詩』 初版	文)スリヴォン ポンヴァンナー 絵)サナムサイ中等学校の生徒達	2,500部	公益信託 大成建設 自然・歴史環境基金

『家のまわりの虫』は、ラオスに生息する身近な虫を紹介する。2013年に出版してから絶版となっていたものを、今回「生物」など学校の授業の教材として活用してもらうことを視野に入れて再版した。

『私の村の料理』は、ラオス北部・中部・南部の郷土料理のレシピ本。2016年に出版してから売れ行きが良く販売分が在庫切れになっていたのと、授業での活用を兼ねて再版した。

『なんのどうぶつ～文字絵本1～』は、小学校低学年向けにラオス語の文字や単語を楽しく学ぶための絵本として評価が高く、学校配布用として国際機関より要望があり増刷した。

『アタプーの詩』は、2018年にダム水害被害を受けたアタプー県のサナムサイ中等学校の先生と生徒の合作による詩集絵本である。12月に当該校を訪問し、「絵本制作ワークショップ」を実施、その後掲載画を選考し編集を経て出版した。2021年5月に、出版本の活用ワークショップを現地で実施する予定だったが、コロナの影響で延期となった。

スタッフ対象の図書制作業務に関わる技術研修は、今年度も業務が忙しく実施する余裕がなかったため、次年度の実施を予定している。

市場を意識した出版のための現状調査・ニーズ調査の一環として、月毎の販売実績のデータ分析をすることにしたが、担当スタッフによるデータ記録・集計作業が追いつかず、月次での分析が出来なかった。

著作者との出版契約書は、デジタル許諾を含めたものに改訂した。

<成果と課題>

今年度の出版は、今後の事業実施や学校図書室での活用に有効と思われるものを計画的に制作することができた。制作プロセスやその後の活用方法までトータルで考慮した出版事業を展開していくことで、読書推進事業や資金調達にも効果をもたらすことができる。

現在のラオス事務所スタッフは再版の経験は有しているものの、新刊を出版する経験は不足している。人材育成をしたいところではあるが、現状のスタッフの業務配分や能力を考えると限界がある。

Ⅲ 子どもセンター(CCC/CEC)

<計画> 1994年に子どもたちの自己表現活動の場として開設した「子ども文化センター(CCC)」は、社会に定着し全国に広がった。しかし、子どもたちの環境が変化する中で、来館者数が減少し、活動が停滞しているセンターが増えている。各子どもセンターの運営安定のために、どのようなアドバイスや支援ができるかを検討していく。

- ・昨年度実施した当会が設置・サポートしてきた子どもセンター(CCC/CEC)の実態調査結果をふまえ、支援・連携するセンターの検討と選択をおこなう

- ・子どもセンターで、支援・連携の一環としてアクティビティを実施する
- ・センターに関わる青年海外協力隊員および元隊員との情報交換をさらに深め、センターの新たな活動展開の可能性を追求する

<実施>

今年度は、当該事業に関する業務を実施する余裕がなかった。

<成果と課題>

現在実施している事業のなかで当該事業の優先度は低く、他事業とのバランスや資金状況から、実施できなかった。

IV 奨学金事業

<計画> 2019年度より開設した会独自の新規奨学金事業は、I-1の事業地であるヴィエンチャン県ポンサイ中等学校の5名に加えて、同事業の本年度対象校であるサカ中等学校5名、ヒンフープ中等学校5名の合計15名の生徒に対して、奨学金の給付を行う。

<実施>

I-1の事業地であるヴィエンチャン県ポンホン郡ポンサイ中等学校、サカ中等学校、ヒンフープ郡ヒンフープ中等学校の3校にて奨学金事業を実施。10月に募集を開始し、11月に選考会議をおこない、4~7年生から各校5名、合計15名の学生を決定し、12月に奨学金を給付した。

(ご支援 マンスリーサポーター、指定寄付)

<成果と課題>

就学継続が困難だった生徒たちに、学習を続ける機会を提供することができた。奨学生達は、開設された図書館を学習などに積極的に活用しており、事業の相乗効果がみられた。応募・選考の過程では、一部の教員が募集要項を受け持ちの生徒に配布・回収しきれなかったり、選考時に生徒の状況を多角的にみて、総合的に判断することに慣れていない学校側関係者がいたりしたことから、選考を更に工夫していきたい。

V 国内事業

V-1. 各種イベント

<計画> ラオス理解、活動理解の促進となるよう、目的、成果を明確にした上で各種イベントに参加する。コロナ禍など社会情勢に対応し、資金調達を目的とするイベントをオンライン開催を含め模索する。イベントなどにより新たな支援者協力者の開拓を図る。

<実施>

エスノースギャラリーでの展示販売会、英国風喫茶メイフィールドでの販売会などを通して、資金調達と共にラオス理解、活動理解を広める活動をおこなった。パルシステム神奈川ゆめコープが開催した「ハートカフェ」には、オンラインで参加し、新たな形式での方法に広がりが出た。また、昨年度は中止となった「ピーマイパーティ」をオンラインにて、ラオス事務所やホアイホンセンターと生中継という初の形式で、開催することができた。一方、新型コロナウイルスの影響により、恒例の京都織物展、ラオスフェスティバル、グローバルフェスタ2020が中止となった。

<成果と課題>

ピーマイパーティは、有料イベントとしてオンライン開催という初の取り組みにチャレンジした。イベントでは、ラオスの2か所からの生中継を実施することができ、新しい広報手法としてオンラインによるイベント開催の可能性を感じることができた。各イベントが中止となる中で、資金調達を目的とする新たなイベントの開催には至っていない。

V-2. 出前講座活動

<計画> 学校などを訪問して実施する「出前講座」を、年間2~3件、開発教育として継続して実施する。ラオス事務所とオンラインで結び企画など、新しい形式による出前講座を開発する。

<実施>

今年度も継続して以下の学校に講師派遣をおこない、ラオスや国際協力、当会の活動への理解を促進することができた。大学はオンラインでラオス事務所と繋いで実施した。

11/5、11/11 女子美術大学附属中学校
11/7 町田市立真光寺中学校
1/30 藤女子大学（Web公開授業ゲスト参加）
2/9 愛知県立大学
6/1、6/8 学習院女子大学

<成果と課題>

オンライン開催と対面を合わせて、5件の講師派遣を実施することができた。オンライン形式による出前講座は、安定的に実施できるようになっており、新しい可能性として今後も育てたい。新規の開拓はできていない。

V-3. ラオス語絵本プロジェクト

<計画> 支援者の拡大及び開発教育として、個人協力者に加えて、企業・学校・団体と連携して実施する。メディアへの広報を強め、プロジェクトの社会的認知度をあげ、年間30件の参加、600冊の図書の完成させラオスへ送る。プロジェクト参加者が活動支援者となるよう組み立てを工夫する。既存の翻訳シートのデジタル化を完了させる。翻訳図書リストの入れ替え検討会議をおこなう。

<実施>

今年度のプログラム申込者は96件で、合計888冊の絵本が作成され、昨年度よりも2件198冊増加した。また、企業での取り組みとして、沖電気工業株式会社、株式会社ニコンの絵本作りイベントも、在宅での実施となったことで参加者が増え、完成する絵本も増加した。翻訳シートデジタル化と改訂作業は、インターンの在宅活動として少しずつ進めつつある。図書リストの検討会議は実施することができなかった。

<成果と課題>

去年に引き続き、外出自粛中に「自宅でできるボランティア」として注目されており、新規申込が継続増加している。参加者には継続した参加や他の活動へ協力いただく例もある。企業との連携での開催も増え、参加者も増加している。これらのイベントはオンラインでの開催が定着しているが、国際協力への参加機会の提供に留まらず、「ラオスのことも」のNGOとしてのメッセージをきちっと発信し、支援者の増加と結びつけるには、より工夫が必要とされる。また需要が高い一方で、ラオスへの図書輸送の業務も加わり、在宅勤務を併用しながら対応するスタッフの負担が高く、工夫の余地がある。

V-4. 書き損じハガキの収集

<計画> 資金調達及び支援者拡大として、個人協力者に加えて、企業・学校・団体からの協力を得るなど、新規支援者の開拓をしつつ、年間150件、3,000枚を目標とし、葉書及び切手の収集をおこなう。他プロジェクト参加者に対して、書き損じハガキの収集の呼びかけを強める。

<実施>

今期は82件、書き損じ・使い残しハガキ2,594枚、未使用切手133,380円のご支援を頂いた。

<成果と課題>

目標値に達することができなかったが、枚数は昨年よりも766枚増加した。より収集を拡大するためには、企業や自治体との共同などプロジェクトの立て方を考え直す必要があり、国内プロジェクトとしてより積極的な働きかけをおこなう準備を始めた。

会の運営

<計画> 市民性を大切にしながら、より専門性をもつNGOとして安定した活動が継続するよう、東京、ラオス両事務所間での情報共有を深め、事業運営における論理性を常にチェックすることで活動の質を高める。スタッフの能力を研修などにより高め、組織の運営能力の向上を図る。これまで以上に対象を明確にした広報活動を強化する。支援者を増やすために、ファンドレイジングの手法により多様な資金調達をすすめる。

VI 理事会

<計画> 経営、資金調達、プロジェクト進行などの状況を把握し、プロジェクトの進捗、成果の確認により、組織運営を管理し運営方針の決定をおこなう。年に3~4回開催する。広報や出版等の事業分野において、理事は役割を積極的に担う。オンライン会議システムを利用した理事会、総会への参加が可能なように環境整備をすすめる。

<実施>

以下の9名の理事、監事により運営が担われた。

理事 ・飯川 桃子 ・塩谷 光 ・新藤 雅章
・野口 朝夫 ・西村 恵子 ・森 透
・チャントソン インタヴォン
監事 ・矢崎 芽生 ・脇田 康司
アドバイザー ・小林 毅
顧問 ・長野 ヒデ子 ・やべ みつのり

年4回理事会を開催し、参加者は延べ26名であった。毎回、オンラインを併用した開催となり、ほぼ全理事が出席した。財政状況、資金調達、プロジェクト運営についての報告のほか、組織運営強化の方策などが話し合われた。

第1回 8/29 7名出席（うち書面評決1名、オンライン3名）

主なテーマ：第18期事業報告案・決算報告案の承認、第19期修正事業計画案・修正予算案の承認、監査報告承認、テレワーク規定、総会手順確認

第2回 12/5 7名出席（うちオンライン3名）

主なテーマ：日本NGO連携無償事業進捗報告、JICA草根の技術協力事業申請報告、特別募金実施状況報告、カレンダー販売報告、通信・年次報告発状況、活動ミーティング実施報告

第3回 3/6 7名出席（うちオンライン6名）

主なテーマ：日本NGO連携無償事業進捗報告、事業申請結果とその後の対応の報告、財務状況報告、カレンダー販売報告、ラオスで開催予定のイベントについて、クラウドファンド実施計画について

第4回 6/26 5名出席（うちオンライン4名）

主なテーマ：財務状況の報告と来期の方向性について討議、第20期事業計画・予算案の承認、理事選任、アドバイザー契約の承認、ラオスでのイベント実施報告、ピーマイパーティ実施報告、クラウドファンド報告、

（上記は、理事監事の出席人数。その他、アドバイザー、スタッフが参加している）

総会

<実施>

9月12日、2020年度通常総会を活動会員38名（オンライン参加者9名、書面表決者15名、委任状5名を含む）、賛助会員3名、活動協力者7名、計48名が参加し開催した。2019年度の事業報告案及び決算報告案に関する事項が承認され、2020年度の事業計画書、予算案について報告された。第2部は「ラオスの読み聞かせを楽しむ」というテーマで、ラオス事務所スタッフによる読み聞かせが劇をおこなう動画を紹介した。代表のチャントソンからは、読書推進活動の重要性と子どもだけでなく大人へのアプローチが大切であることなどが語られた。

Ⅶ 東京事務所 組織運営

東京事務所は以下のメンバーで運営を担当した。

野口朝夫 常勤非専従事務局長 1992年1月入職
赤井朱子 統括、プロジェクト担当 1995年4月入職
伊藤珠希 国内事業担当 2018年10月入職

日常業務においてテレワークを導入し、年間を通じて、常勤専従スタッフ2名、常勤非専従事務局長1名で運営を担当した。また今年も会計専門のボランティアスタッフ2名（風間美苗さん、福島孝好さん）の継続した協力により、事務局が支えられた。

Ⅶ-1 事業運営

<計画>

- ・事業成果の継続と発展を重視する
- ・読書推進の専門家・活動家と連携し、プロジェクト運営の質を高める
- ・会員および支援者による継続支援のツールとして、きめ細かい「広報」活動をおこなう

<実施>

ヴィエンチャン県における中等学校での図書館整備を通じた読書推進事業が継続した。前年度ポンサイ中等学校でおこなった図書館建設および、生徒先生に対しての図書館を活用する方法を伝えるセミナーの成果により、生徒、教員の図書館利用は進んでいる。今年度はさらにサカとヒンフープの2カ所の中等学校で120㎡ほどの図書館を建設し、読書推進活動に取り組んだ。今期は新型コロナウイルスによる渡航制限があり、計画していた専門家派遣及び事業調整派遣を実施することができなかった。しかし、インターネットを活用し現場と結びながらの工事監理や、オンラインによる専門家のセミナー参加、先生方に対するアドバイスなどにより、スケジュールの遅れはあったものの、概ね成果を得ることができた。また、広報活動では、会員や支援者に向けて、紙媒体での広報を継続するとともに、ソーシャルメディアの様々なツールを使用した発信を積極的に実施した。更に動画配信やオンラインイベントの実施などにも取り組み、継続的な支援につながった。

<成果と課題>

コロナ禍等これまで経験したことがない困難な状況において、理事や監事の指導、ボランティアスタッフの貢献、会員や寄付者のご協力により、事業を実施することができた。とりわけ事業運営の安定、質の向上の努力のために、専門家によるアドバイスが大変価値を持った。感謝に堪えない。

VII-2 組織運営

<計画> ・事業進捗、会計状況などの報告書が定期的に作成され、評価がおこなわれる

- ・東京事務所が担う事業の指標を開発する
- ・両事務所の情報共有が確実となるよう、報告書の共有をすすめる
- ・ボランティア、インターンに対し、事務所運営やイベント等の担い手として参加を高める

<実施>

コロナの影響からテレワークでの業務とせざるを得なくなり、さらに東京事務所スタッフが渡航出来なかったことにより、両事務所での情報共有において難しい部分があった。しかし「東京しごと財団」の支援によりできたPC環境の整備を活用することで、スタッフの在宅によるテレワークでもコミュニケーションを維持することができた。組織運営や現地でのプログラム実施においても、専門家のアドバイスをリモートにより常に受けることにより、適切な募金活動や、活動の質を向上させることができた。

イベント中止により困難となっている物販などによる資金調達にかわり、特別募金の組み立て、クラウドファンディングの実施などにより、多くの方からのご支援をいただくことが出来、前年度を超える調達となった。頻繁なソーシャルメディアを通じての広報などが成果をもたらしている。

テレワーク体制下でも、アドバイザーが主導する形で定期的にスタッフ会議を開催し、課題を話し合い解決するとともに、スケジュール調整をおこなうことができた。コロナの影響で多くのNGO駐在スタッフの帰国があったが、当会スタッフは相談の結果帰国せず、業務を継続した。このことで、プログラム運営に空白期間をつくることがさけられた。

また、駐在員により困難な時期におけるラオス事務所との情報共有などをおこなうことが出来、業務上の不安を減らすことができた。課題であった両事務所の情報共有もすすみ、年次での活動振り返りや計画策定が東京事務所主導でなく、ラオス事務所からの意見も反映させて決定されるようになった。

<成果と課題>

今年度はこれまでに経験したことがないコロナの影響により、各種業務がスケジュール通り進みにくく、その調整のために、スタッフの業務量が増した。さらに活動の質を高めるための業務量も増加している。このような状況に限られた体制で対応するためには、業務の取捨選択、優先順位の明確化、効率化などが必要となっている。

VII-3 資金調達・広報

<計画> ・これまでの寄付金及び事業補助金を維持しながら、「ファンディング」に基づき、新たな寄付者を獲得するために、対象を明確に意識した発信活動を続ける

- ・ソーシャルメディアでの広報活動に積極的に取り組み、フェイスブックのフォロワーを1400名に増やす

- ・年に二度の特別募金を企画し実施する
- ・マンスリーサポーター制度を促進し、新規10口の加入を得る
- ・遺贈制度を広報するパンフレットを製作し、受付を開始する
- ・WEB上でラオス語図書や小物を販売するBASEショップの魅力度を上げ、販売実績を伸ばす
- ・新型コロナウイルスにより中止となったピーマイパーティに変わるイベントを企画する
- ・新たな支援者、協力者の拡充のため、新規名簿登録者100名を獲得する

<実施>

各種活動を紹介するために、以下のような情報発信をおこなった。

- ・ホームページ記事発信 : 25回 (前年度: 27回)
- ・ブログ記事投稿 : 7回 (前年度: 23回)
- ・フェイスブック記事投稿 : 130回 (前年度: 151回)
- ・フェイスブックフォロワー : 1,296人 (前年度: 1,218人) ※期末時点
- ・インスタグラム記事投稿 : 37件 (前年度: 16件)
- ・ツイッター記事投稿 : 36件 (前年度: 16件)
- ・新聞記事掲載 : 0回 (前年度: 2回)

ホームページの更新は順調におこなわれている。Facebookの投稿も、ラオス事務所発信の記事を翻訳して紹介しつつ、投稿記事を作成している。新聞の掲載は、アプローチは行っているが、今年度は0回という結果になった。

紙媒体としては「ラオスのこども通信」を以下の通り年3回 計4,500部発行した。

78号 (12月発行) 「ラオス語『文字絵本』『数字絵本』の誕生」

79号 (2月発行) 「学校図書館がもっと進化するために」

80号 (6月発行) 「緊迫、コロナ第2波のラオス」

年次報告書は10月に1,500部発行。奨学金を支援するマンスリーサポーター向けに「マンスリーサポーター通信」を8月と2月に発行した。

テーマを定め呼び掛ける特別募金は、以下のスケジュールで2回実施した。

- ・6月～9月：特別募金 募金額合計1,027,910円
- ・12月～3月：冬募金「子どもが初めて出会う絵本にもう一度輝きを！」
募金額合計814,120円

2020年6月中旬から開始した特別募金は、100万円を超える結果となり、活動への期待を改めて実感した。また、不足する資金を補うために2021年4月20日～5月30日には、クラウドファンディングで図書室開設資金を募ったところ、53名の方から804,000円の支援をいただくことができた。

恒例のオリジナルカレンダーは、『ラオスのKAMISHIBAI』を1,500部制作した。販売数は1,022部となり、目標の1,200部には届かなかったが、リピーターも多く大変好評で、757,566円の売上となった。

マンスリーサポーターの新規加入は1件のみであったが、ラオス語絵本プロジェクトへの参加者が増えたことから、今年度の新規名簿登録者は98件となった。

<成果と課題>

資金調達では、リピーターによるサポートが継続されているが、SNSで情報を共有している方や絵本プロジェクトに参加している方などを、どのように活動支援者、新規寄付者として結びつけることができるかが昨年度に引き続き課題である。SNSでの情報発信のやり方やタイトルのつけ方などさらなる工夫が必要である。

VII-4 人材育成

<計画> 専門家とアドバイザーの指導と協力を受けつつ、募金、広報、事業評価、図書館運営、出版の領域でスタッフの実務研修を重ねる。

<実施>

今期も定期的なスタッフミーティングの開催により、アドバイザーから募金、広報、事業

評価について継続的にトレーニングを受け、業務での成果を生むことができた。オンラインを活用することにより、これまでラオスでおこなわれていた研修プログラムに東京スタッフが参加するなど、新しい可能性も生まれた。小規模組織として、人材育成、トレーニング参加に限度があるが、オンラインを利用することで、参加の可能性が増加している。

<成果と課題>

組織活動の安定のためには、さらにファンドレイジングや広報に関わる人材、プロジェクト運営のためには、読書推進活動にかかわる人材の育成が必要である。

VII-5 活動ミーティング・勉強会

<計画> 活動ミーティングは、プロジェクト報告やイベントの打ち合わせなどの他、ラオス語絵本プロジェクトの体験なども入れ、年4回開催する。これまでの開催形式に加え、オンラインを利用したミーティングも開き、遠隔地の方などが広く、気軽に参加できる工夫をおこない、参加者増を図る。

「ラオスを紹介する」「活動内容についての共感を獲得する」場として、勉強会や活動報告会などを、活動ミーティングの日程と調整しながら実施する。

<実施>

活動ミーティングは以下の日程で実施した。

7/18 ラオスの今を知ろう～ラオス駐在員と話すビデオ生中継～（参加者20名）

11/16 【絵本好きの方、大集合！】～読み聞かせ・好きな絵本の紹介を通して、絵本の魅力について考えよう～（参加者11名）

1/18 【新年】カレンダー発売記念イベント～紙芝居支援について学ぼう～（参加者10名）

3/20 Blue Festa現地中継、ピーマイ企画、現地プロジェクト報告（参加者9名）

コロナ禍によって、集会在難しい中でオンラインでの実施が成功した。ボランティアによる企画によって、内容にバリエーションが増えた。ラオス事務所とつないだり、イベントの生中継を行うなど、やり方に広がり生まれた。

VII-6 ネットワーク

<計画> ・国際協力NGOセンター（JANIC）、教育協力NGOネットワーク（JNNE）のネットワークを維持する

・図書館ネットワークとの連携に取り組む

・学習院女子大学などの教育機関とインターンや開発教育における連携を継続する

・子どもセンターに派遣された青年海外協力隊OBとの連携、情報交換をすすめる

<実施>

国際協力NGOセンター（JANIC）正会員、教育協力NGOネットワーク（JNNE）会員を今年度も継続し、森透理事がJNNE代表を務めた。

また、大学がオンライン授業となり、開発教育チームが活動出来ないため、連携はできなくなりましたが、中学校での開発教育授業はスタッフにより継続して実施した。

VII-7 インターン・ボランティア

<計画> ・開発教育の一環として日本人のインターン・ボランティアを受け入れる

・会計など専門ボランティアの募集をおこなう

<実施>

インターンは、ドットジェイピーを通じて夏と春に短期計5名（吉川由莉さん 上原美優さん 鈴木萌花さん 江原歩美さん 渡辺咲来さん）を受入れ、継続で1名（岡田龍之介さん）合計6名が事務所業務をサポートした。

<成果と課題>

コロナの影響があり、インターンの継続的な活動ができなくなっている。オンラインでの作業は、指示や作業量に限界がある。ドットジェイピーで関わったインターン生をどう今後結び付けるかが課題となる。

VII-8 イベント

<実施>

この1年、以下のようなイベントを実施・参加した。

7/20-8/31	沖電気工業(株)ラオス語絵本作り (社員が在宅にて実施)
8/4-16	エスノースギャラリー「ラオスの手仕事vol.7」開催
9/13	(株)ニコン 絵本作りイベント オンライン開催(年4回開催:12/16、3/13、6/19)
9/19-25	仙行寺にて「受け継がれる『思い』～ラオス、自然からの贈り物～」開催
9/24	フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN イベント協力
11/18-22	英国風喫茶 メイフィールド 織物展「ラオスの彩りvol.12」開催
3/20-21	BlueFesta 出店
5/26	シトリックス・システムズ・ジャパン株式会社 オンライン絵本作りイベント
6/9-13	英国風喫茶 メイフィールド 織物展「ラオスの彩りvol.13」開催

VIII ラオス事務所 組織運営

この1年間の体制は以下の通りであった。

スラピー	ラオス事務所所長	2006年1月入職	2011年7月から事務所所長
スラート	ラオス事務所所長補佐		2020年1月入職、2020年11月退職
チャンシー	事務所図書室・図書在庫管理		1998年8月入職
バンロップ	図書館事業、セミナー講師補助		2013年7月入職
スパン	セミナー講師補助、図書室活動		2014年12月入職 2021年7月退職
スパポーン	事務・会計補助		2014年12月入職
渡邊淳子	日本人駐在員		2019年4月入職・ラオス事務所赴任
ダラー	顧問	2005年4月入職 (2011年7月現地代表から顧問へ)	
他	清掃1名、庭師1名	(パートタイム)	

VIII-1 事業管理

<計画> ・「読書推進」「出版」「子どもセンター」の事業を着実に実施する

- ・事業実施の前提となるラオス政府との覚書MoU、MoAに必要な要件（定期的な報告書の提出、評価会議の開催、所轄庁への報告）を着実に実行する
- ・MoU II（N連事業、奨学金事業以外のプロジェクトが含まれる）の締結を進める

<実施>

「読書推進事業」は、コロナ禍でスケジュールの変更・延期があったものの、2年次事業は概ね実施出来た。日本とのオンライン研修なども、当初の予定を変更して臨機応変に対応した。「出版事業」はほぼ予定通り進められた。この一年は当初の事業計画に加え、コロナ禍での対応も必要となったため、「子どもセンター事業」まで手が回らない状態となった。MoU I に規定されている報告業務、評価会議開催などは遅れがちだが進めることができている。他の活動をカバーするMoU II の締結は、締結までに係る期間などを考慮し、次期MoU I と併せて実施することにした。

VIII-2 組織運営

<計画> ・事業の実施状況の振り返りがおこなわれ、事業計画案と予算案の策定に反映される

- ・スタッフ会議が定期的開催され、各業務の進捗確認、振り返り、実施計画、調整、業務分担確認などがおこなわれる
- ・上記に関わる月例報告が、所長より東京事務所へ提出される

<実施>

スタッフ会議の定期的な開催や事業活動後の振り返りや年度末の事業・組織評価などにより、スタッフが徐々に、NGOとしての活動全体を見通すことができるようになっている。

<成果と課題>

年を追うごとに、事業の進捗状況やスケジュール管理、活動のふりかえりなどを自身で行えるようになり、年度末の事業・組織評価でも、状況を見据えた建設的な意見できるようになってきた一方で、まだ駐在のファシリテートやフォローがないと難しい状況である。特に主体的に問題を想定し、対処を準備してゆくことは十分でない。これらの課題は、所長の主導が大切であり、所長の運営管理能力強化がなお必要とされている。

月例レポートは、所長が他の業務に追われてなかなか出せない状況が続いており、提出しやすいようフォーマットの改正を検討している。

VIII-3 資金調達

- <計画> 【図書の販売】・資金調達手段として位置づけ、図書販売に積極的に取り組む。
- ・販売はこれまでのルート以外、国際機関、国際協力NGO、私立学校などに広げる。
 - ・販売実績のデータを整理し分析する。
 - ・図書販売は5,300冊120万円の売り上げを目指す。
 - ・フェイスブックなどを用いた図書販売の広報に取り組み、販売量を上げる。
- 【受託事業】・国際機関、国際協力NGOからの図書セット制作の受託事業を継続する。
- 【新規事業】・自己資金拡充のため、ラオス国内の企業や団体へむけた募金パッケージを検討する。

<実施>

【図書の販売】

- ・月ごとに販売実績を入力するフォーマットを作成し、個人顧客、委託販売店、私立学校、国際NGOのグループ毎に売上を把握できるようにした。販売委託先は昨年度の31か所から36か所に増加した。
- ・フェイスブックなどの広報や、ラオスで活動するNGO団体への本の売り込みを促進するため、販売本リストの作成、訪問先リスト作成、ラオス事務所フェイスブックページの開設・投稿を行った。
- ・ラオスでの図書販売売り上げは、目標値の5,300冊、120万円を大きく上回り、6,888冊、146,724,566キープ（約170万円）を達成した。国際NGOからの大口の発注があったことが売り上げを伸ばした。一方で、訪問活動が困難なため、販路開拓を目指す私立学校の売込が充分でない。

【受託事業】

- ・ラオスで活動する国際機関4団体（Save the Children, Plan International, Lotus World, Sala Sujipuli）から、図書購入や研修提供を受託した。

【新規事業】

- ・ラオス国内の企業や団体へむけた募金（寄付）パッケージは、検討する時間的余裕がなかった。

VIII-4 人材育成

- <計画> ・専門家の協力を受けつつ、タイでの学校図書館の活動事例を視察するスタッフ研修を実施する
- ・図書館や出版に関し、専門家のアドバイスを受けながら実務研修、ならびに実務を遂行する
 - ・所長のマネジメント能力を高めるため、スタッフ会議の定期開催と月例報告の作成を駐在員がサポート
 - ・月例報告に対し、東京事務所が定期的にフィードバックをおこない、その質を高める

<実施>

- ・タイでの学校図書館の活動事例視察は、コロナの影響もあり、まだ実施には至っていない。
- ・出版契約書の内容を、編集者の高野直子さん、新藤雅章理事のアドバイスを受けながら、デジタル許諾を含めたものに改正した。
- ・ALC図書館の改善や日本NGO連携無償資金協力事業での学校向けの研修を見据えて、専門家下田尊久さんによるスタッフへの実務研修を実施した（I-3参照）。
- ・スタッフ会議の定期開催と月例報告の作成を駐在員がサポートした。スタッフ会議は、週1回のペースで開催しており、事業スケジュールのマネジメントが出来るようになった。月例報告は、上半期は提出できていたが、下半期はスタッフの退職で提出できなかった。
- ・以下の日程で専門家や駐在員によるスタッフ向け研修を実施した。
 - 駐在渡邊による図書館実務研修（図書館サイン・展示）：計2回
 - 専門家下田さんによる図書館実務研修（授業における図書活用）：計4回オンライン
 - アドバイザー小林さんによる計画づくり研修：計1回オンライン
 - 東京事務所スタッフ伊藤によるSNS研修：計1回オンライン

VIII-5 広報

- <計画> ・フェイスブック、ブログなどを用い、活動やラオスの教育事情に関する情報発信を強化し、日本社会及びラオス社会での団体認知度を上げる
- ・ラオス事務所版フェイスブックページの整備をすすめ、ソーシャルメディアを利用した読み聞かせ動画の配信などにより団体認知度を上げ、出版本の販売促進を意識した読書推進活動を推進する

<実施>

- ・ラオス国内での団体認知度を高めるため、2020年7月にラオス事務所のフェイスブックページを開設し、活動紹介や出版本の宣伝をした。また、スタッフブログ、ニュースレターなどで、ラオス事務所の活動やイベントなどの情報発信をおこなった。
- ・販売本リストをFacebookページに投稿したり、NGO団体等に配布するなどして、図書販売促進に努めた。
- ・昨年度に開始した、自粛生活の子ども達に向けた読み聞かせの動画配信は（Youtubeチャンネル）は、2021年カレンダーに掲載した紙芝居の動画を月ごとに配信した。
- ・ラオス国内での団体認知度と図書販売促進を高めるため、2021年4月2～3日に「チャンタソン旭日双光章・JICA理事長賞記念イベント」を開催し、ラオスの関係省庁、他国外使館やINGO団体を招待し、活動や出版本を紹介した。

VIII-6 ネットワーク

- <計画> 国際協力NGO（INGO）、日系NGO（JANM）との連携を維持するとともに、ラオスのNGOの中で当会の認知を広める。

<実施>

7月にSDGsの会議に、9月に外務省とINGOとの会議に出席した。INGO内ではWhatsAppグループでコロナ情報も含めた日々の情報交換を行っている。日系NGOとの連携は、コロナ禍以降、日本人駐在員どうしの情報交換をより密にし、情報交換の機会を設けた。

VIII-7 インターン・ボランティア

- <計画> 社会開発やNGOへの理解を深めるため、ラオス人学生インターンやボランティアを受け入れる。

<実施>

今年度はコロナ禍により、併設図書館の一時閉鎖やテレワークが推奨されたこともあり、ラオス事務所で、インターンやボランティアの受入れは実施しなかった。

VIII-8 訪問受入れ

- <計画> 寄付者、支援者の拡充と活動への理解のために会員や開発教育のスタディツアーなどの訪問を受け入れる。

<実施>

この1年、以下のようにオンライン授業(*)や受入、イベント実施をおこなった。

7/7,14	学習院女子大学 *
7/18	オンラインイベント駐在員の生の声を聞こう！
1/18	ご支援者1名訪問
1/25-29	ブックフェア(ヴィエンチャン都、ナナサートラオ学校)
1/30	藤女子大学 *
2/9	愛知県立大学 *
3/4-6	ブックフェスティバル出展(国立ドンドーク大学)
4/2-3	チャンタソン旭日双光章・JICA理事長賞記念イベント(ホアイホンセンター)
5/20	クラウドファンディングオンラインイベント
6/15,22,29	学習院女子大学 *